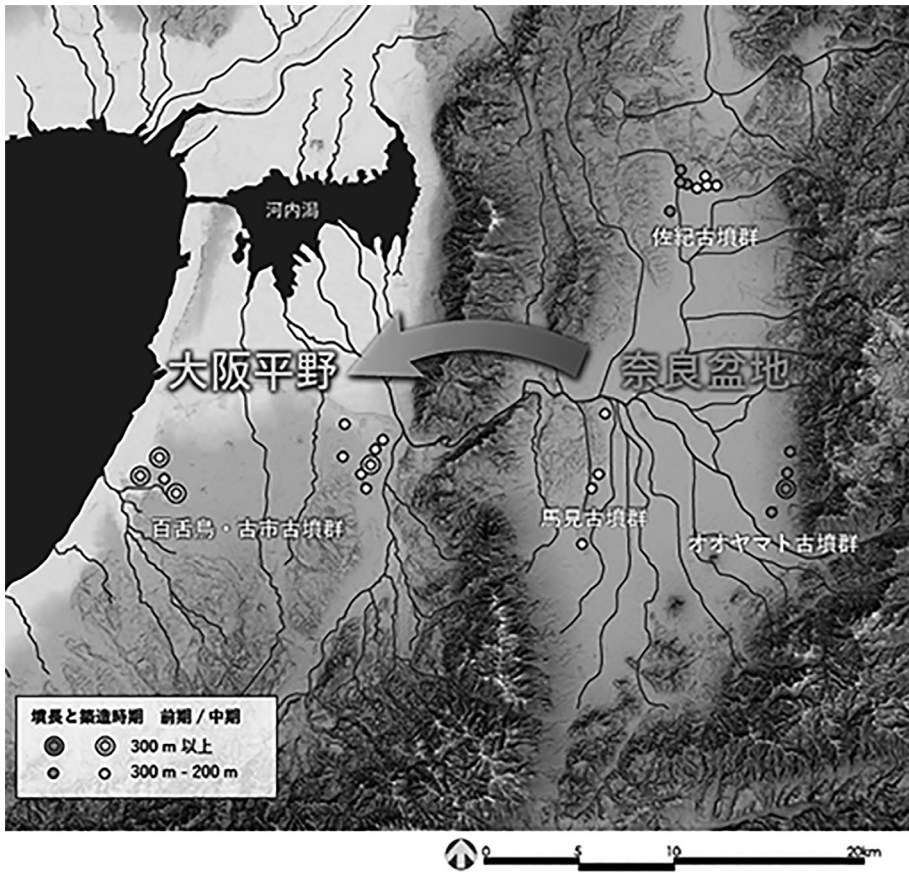


887

近畿文化

2023・10月

◎発行 近畿文化会事務局 〒543-0001 大阪市天王寺区上本町6丁目5番13号 上本町YUFURA7階 TEL 06-6775-3686
編集・発行人 中野尚彦 令和5年10月1日発行(毎月1回1日発行) 定価 300円 無断転載・転用禁止



古墳時代前期から中期にかけての巨大前方後円墳を含む古墳群の移動 (奈良盆地から大阪平野へ)
提供 百舌鳥・古市古墳群世界遺産保存活用会議

「百舌鳥古墳群」築造の時代

白
神
典
之

一、はじめに

history story は、語源が同じ「兄弟関係」といわれています。さらに、historyは「物語」でもあるといえます。歴史を物語でみていく、或いは考えていくことは自然なことですし、より理解しやすくなると思います。今回、ストーリーをイメージしながら百舌鳥古墳群についてお話しします。主役は当然巨大古墳ですが、築造された時代背景に思いを馳せていただくことで一層理解が深まるものと思います。

二、古墳

「古墳」は主に土を盛ってつくられた墓で、およそ三世紀から七世紀にかけて築造されました。文化庁が把握している古墳数は、日本全国で約一六万基を数えます。その多くは直径一〇メートル程度の円墳ですが、鍵穴形をした前方後円墳は全国で約四七〇〇基あるといえます。巨大な古墳はこの前方後円墳であることからみて、最も上位の形の古墳と位置付けられます。およそ六世紀末までの古墳時代の各段階において、最大の古墳は前方後円墳でした。そして三世紀中頃から四世紀後半にかけて、その時々最大の前方後円墳は奈良盆地で築造が続けられました。

三、百舌鳥古墳群の立地と造営期間

四世紀の終わり頃になると、奈良盆地から大阪平野南部へ場所を移し、そ



この絵は百舌鳥古墳群の想像図です。最後のニサンザイ古墳(②)が完成したばかりのところですが、いちばんはじめにできた乳岡古墳(③)は木がたくさんあります。仁徳天皇陵古墳にも草が生えだしています。

百舌鳥古墳群の全体図

※その後の調査で古墳の形がかわっている場合があります。



百舌鳥古墳群 全体図 堺市博物館『古墳のなぜ?なに?』(2020)より転載、説明文一部削除

以降、最大の前方後円墳は、堺市の「百舌鳥」と羽曳野市・藤井寺市の「古市」で築造されることとなります。この現象については、当時の国際情勢とその対応や政権交替に理由を求める意見があります。

大阪平野西部にある百舌鳥の地に築造された百舌鳥古墳群は、四世紀後半に海岸線から数百メートル離れた標高約五メートル付近に、長山古墳(墳丘長一一〇メートル 堺区協和町)と乳岡古墳(墳丘長一五五メートル 堺区石津町)が築造され、群の形成がはじまりました。その後、標高約一八メートル以上の東方台地上に大塚山古墳(墳丘長一六八メートル 消滅)、履中天皇陵古墳(墳丘長三六五メートル 西区石津ヶ丘)、いたすけ古墳(墳丘長一四六メートル 北区百舌鳥本町)、御廟山古墳(墳丘長二〇三メートル 北区百舌鳥本町)、仁徳天皇陵古墳(墳丘長四八六メートル 堺区大仙町)、反正天皇陵古墳(墳丘長一四八メートル 堺区北三国ヶ丘町)が築造され、最後に東方奥の丘陵部にニサンザイ古墳(墳丘長三〇〇メートル 北区百舌鳥西之町)が築造され、巨大古墳の築造は五世紀のうちに終了しました。

巨大古墳の築造終了後、群東南部のニサンザイ古墳の南、美濃川右岸にある平井塚古墳(墳丘長五八メートル 北区百舌鳥陵南町)が六世紀前半に築造されました。これが本古墳群では最後の前方後円墳となります。このあとさらに、群南部の大塚山古墳の南、百舌川右岸

に上野芝町一号墳・二号墳(いずれも消滅)といった横穴式石室を埋葬主体とする古墳が六世紀末から七世紀はじめに築造されますが、地域は同じとはいえ、中期古墳群としての百舌鳥古墳群に含めることはできません。

大阪湾の広い範囲から視認できる百舌鳥の台地端に、仁徳天皇陵古墳や履中天皇陵古墳が巨大な墳丘の側面を大阪湾に向けて並ぶ威容は、古墳に求められた「大きくみせる」という役割が最大限に発揮された姿を示しているといえてよいでしょう。これは本古墳群の立地上の最大の特徴です。

墳形は円墳が多い一方、方墳はきわめて少なく、前方後円墳と帆立貝形墳の割合も多いといえます。広義の百舌鳥古墳群を構成する一〇四基の墳形の内訳は、円墳が五八基(墳形不明を含む)、方墳が九基、前方後円墳が三七基(帆立貝形一基を含む)です。

また、墳丘が現存する古墳は四四基です(北区中百舌鳥町の御廟表塚古墳西方にある無名塚一七号墳は小丘ながらも墳丘の残存のようにもみえます)。

四、百舌鳥古墳群の墳丘の巨大さと副葬品の豊かさ
百舌鳥古墳群は、多様な墳形と大から小までの規模の古墳が群を構成しており、古墳群としての盛期を示しています。墳丘長三〇〇メートル以上のまさに超巨大前方後円墳を三基含む古墳群は、百舌鳥古墳群のほかにはありません。

六、世界遺産的価値

世界遺産となった資産は、定められた評価基準に適合して顕著な普遍的価値を有すると、国際的に認められたものです。これを世界遺産的価値と読み替えることもできましょう。百舌鳥・古市古墳群は、世界遺産の評価基準の(ⅲ)と(ⅳ)に適合しました。

この評価基準(ⅲ)は「現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文

化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である。」というものです。推薦書における適合の説明は、「百舌鳥・古市古墳群は、群として築造された墳墓の規模と形によって当時の政治・社会の構造を表現した、古墳時代の文化を物語る傑出した証拠である。」となっています。

また、評価基準(ⅳ)は「歴史上の重要な段階を物語る建築物、

その集合体、科学技術の集合体、或いは景観を代表する顕著な見本である。」というものです。推薦書における適合の説明は、「百舌鳥・古市古墳群は、日本列島独自の墳墓形式、すなわち古墳の顕著な事例である。それは、集団や社会の力を最も明瞭に誇示するモニュメントとして祖先の墓を築造した、日本列島独自の歴史段階―すなわち東アジアの政治情勢を反映した古代王権の形成・発展過程―を物語るものである。(中略)それは、葬送儀礼の舞台としてデザインされ、葺石と埴輪で装飾され、幾何学を伴う高度な建築計画と技術をもって築造された、ユニークな建築的到達点である。」となっています。



南西上空からみた仁徳天皇陵古墳 写真提供 堺市世界遺産課

また、評価基準(ⅳ)は「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、或いは景観を代表する顕著な見本である。」というものです。推薦書における適合の説明は、「百舌鳥・古市古墳群は、日本列島独自の墳墓形式、すなわち古墳の顕著な事例である。それは、集団や社会の力を最も明瞭に誇示するモニュメントとして祖先の墓を築造した、日本列島独自の歴史段階―すなわち東アジアの政治情勢を反映した古代王権の形成・発展過程―を物語るものである。(中略)それは、葬送儀礼の舞台としてデザインされ、葺石と埴輪で装飾され、幾何学を伴う高度な建築計画と技術をもって築造された、ユニークな建築的到達点である。」となっています。

七、むすび

一〇基を超える陪冢を伴う仁徳天皇陵古墳が示すように、百舌鳥古墳群が形成された四世紀後半から五世紀後半という時期は、墳丘はもろろんのこと、濠、外周をあわせた古墳の規模が最大となりました。加えて多様な墳形と規模の古墳が群を構成しており、日本の古墳群としての盛期の特徴を余すところなく示しています。



南上空からみた百舌鳥古墳群 写真提供 堺市世界遺産課

仁徳天皇陵古墳と履中天皇陵古墳は立地場所が台地西端で、特に大阪湾からの眺望がよく、古墳の視認範囲はとてつもなく広いといえます。巨大前方後円墳から小型の円墳まで墳形の多様さとともに、規模の大小の違いがみられることや、陪冢とみられる古墳をしたがえた主墳の多さも大変特徴的です。この時代は、まさにわが国における古代の技術革新、古代の文明開化の時代であり、百舌鳥古墳群は、わが国の国家形成過程など、今後の古代史のさらなる解明に不可欠なものです。

膨大なエネルギーを集中して古墳を築造し、それをもって国を統治するといふ、現代人にとって理解に苦しむようなことが、北海道と青森県、そして沖縄県を除く日本列島の各地にわたって行われた時代がありました。古墳は、わが国の成り立ちを考えるうえで、また歴史を正しく理解するうえで欠くことのできない貴重な文化遺産であるのもろろんのこと、人類が生み出した文化の多様性を顕著に示すものでもあります。

(堺市博物館学芸員)

進化する平城宮跡 — のこった奇跡・のこした軌跡 —

岩 戸 晶 子

はじめに

令和五年（二〇二三）一二月、世界遺産「古都奈良の文化財」として登録されて二五周年を迎える平城宮跡。日本の国の礎を築く舞台となった一三〇〇年前の都がほぼ全域にわたって国有化され、発掘調査をはじめとする長年の調査・研究によって、文献の少なさを補うに余りある情報が引き出されてきた。平城京は和銅三年（七一〇）に藤原京から遷都し、途中、聖武天皇による恭仁京への遷都、さらに天平一七年（七四五）の平城への還都を経て、延暦三年（七八四）の長岡京への遷都までの七四年間、首都として機能した。平城宮はその平城京の中核であり、平城宮跡はいわずと知れた奈良時代の中心をなした遺跡である。小学校以降、歴史の授業で学ぶため、現在の日本で教育を受けた人であれば、ほぼ全員が知っているであろう。しかし、「昔、行ったがただの草原で何もなかった。」という印象をもっている人も少なからずいる。そして久方ぶりに平城宮跡に足を運ぶと、その変わりように驚く人も多い一方で、若い世代にとっては、

復原された朱雀門や第一次大極殿があるのが当たり前の風景として定着しつつある。いずれにせよ、平城宮の存在を当然のように知っている我々ではあるが、その存在が忘れ去られていた時期があったことはあまり知られていない。本稿では、平城宮跡が現状の姿に至るまでの歴史を概説してみたい。

奈良時代の平城宮

平城宮は、現代の皇居・国会議事堂・霞が関の官庁街が合わさったものと例えられることが多い。奈良時代の平城宮を詳説することは、本稿では紙幅の関係で割愛するが、基本的事項として、奈良時代の前半と後半とを区分するには、平城遷都を境としていることを確認しておく。現在、大極殿や大極門をはじめ、復原事業が進行中なのは、奈良時代前半期の平城宮の中枢部、「第一次大極殿院」と呼ぶエリアである。一方、第一次大極殿院の東側には、平城遷都後に新たに造営された大極殿を中心とする奈良時代後半期の中枢部があり、「第二次大極殿院」と呼んでいる（図1）。

平安宮への遷都以後
平安京への遷都を敢行した桓武天皇と、その子息の平城天皇・嵯峨天皇はいずれも平城宮で生まれ育った。平城天皇は、桓武天皇から皇位を継いだものの三年ほどで弟の嵯峨天皇に位を譲り、上皇（太政天皇とも）となって平城宮に移住し、さらに平城宮への還都を目論むが、失敗に終わった。いわゆる平城太政天皇の変（薬子の変）である。その後も平城上皇は権力を失いつつも平城宮で暮らした。実は、平城宮及びその周辺の発掘調査では、平安時代前期の遺構や遺物がみつかることがあり、それは平城上皇が滞在していた時期の整備によるものと考えられている。平城上皇が崩御すると、平城宮は政治の表舞台に立つことはなく、地中での長い眠りについていた。平安時代後期に活躍した武将で歌人の源仲正（源頼政の父）による「すみれ咲く奈良の都の 跡とては いしずるのみぞ かたみなりける」の和歌からは、この時期、平城宮ではすでに建物などは維持されてはおらず、礎石のみが残されている状況だった

平安宮への遷都以後
平安京への遷都を敢行した桓武天皇と、その子息の平城天皇・嵯峨天皇はいずれも平城宮で生まれ育った。平城天皇は、桓武天皇から皇位を継いだものの三年ほどで弟の嵯峨天皇に位を譲り、上皇（太政天皇とも）となって平城宮に移住し、さらに平城宮への還都を目論むが、失敗に終わった。いわゆる平城太政天皇の変（薬子の変）である。その後も平城上皇は権力を失いつつも平城宮で暮らした。実は、平城宮及びその周辺の発掘調査では、平安時代前期の遺構や遺物がみつかることがあり、それは平城上皇が滞在していた時期の整備によるものと考えられている。平城上皇が崩御すると、平城宮は政治の表舞台に立つことはなく、地中での長い眠りについていた。平安時代後期に活躍した武将で歌人の源仲正（源頼政の父）による「すみれ咲く奈良の都の 跡とては いしずるのみぞ かたみなりける」の和歌からは、この時期、平城宮ではすでに建物などは維持されてはおらず、礎石のみが残されている状況だった

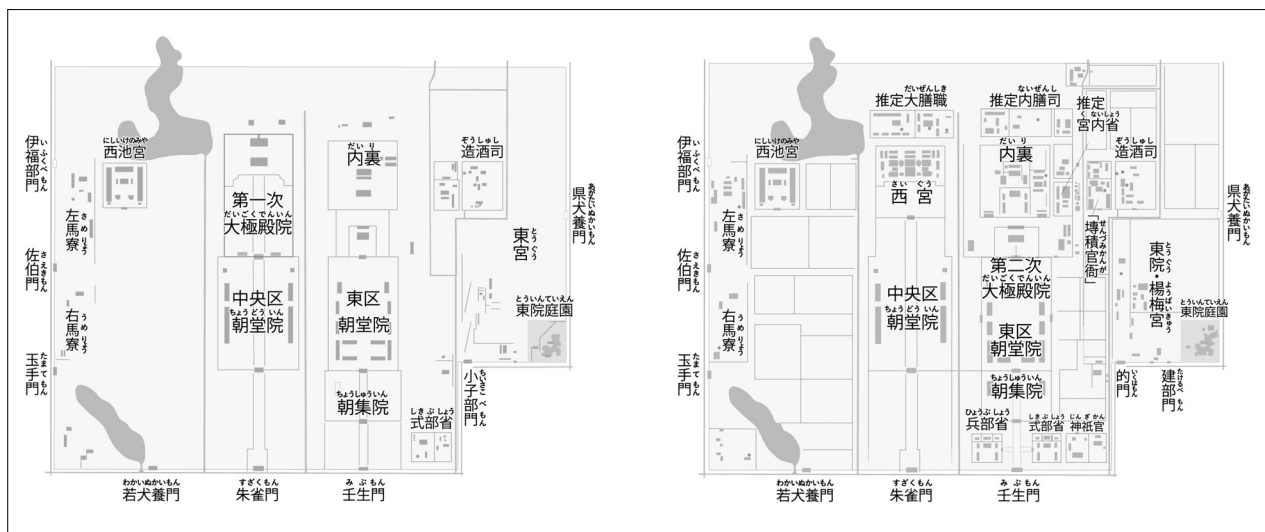


図1 奈良時代前半(左)と奈良時代後半(右)の平城宮

ことが推定できるのだ。

さて、平城宮が眠りから覚めるまでには長い年月が流れる。その間、平城宮があった場所は田畑となり、集落が点在するだけになったようだ。そして、奈良の中心部は現在の近鉄奈良駅一帯に移り、その近世の町並みは「ならまち」として今も目にする事ができる。都市の中心が自然と近隣の別の地域に移り発展するというのは珍しいことで、それは、奈良が平安時代中期以降、興福寺や東大寺など南都の諸寺の門前町として発展したことによる。もし、京都の平安京のように、そのまま同じ場所ですべての人々が営みを続けて現代に至っていたならば、地中にあった平城宮の遺構や遺物の多くは失われていたに違いない。これは偶然とはいえ、平城宮跡を平城宮跡たらしめた要因の一つといえる。

平城宮研究の萌芽

国学の隆盛や尊王攘夷の機運が高まる江戸時代後期、大和の古墳・天皇陵の測量・調査をきっかけに、北浦定政が大和平野に残る地名と地割を参考に、平城宮及び平城京の復元を試みた。先駆的な研究で、北浦が使用した測量道具や野帳は、現在、重要文化財に指定されている。しかしながら、その成果が広く世間に知れ渡ることにはなく、「奈良の都」が奈良のどこにあったのかは、地元の集落の人々の口伝え

で伝承されてきただけで、当時の日本人のほとんどは、具体的な場所をイメージできない状況であった。

そうしたなか、建築史学者の関野貞は、北浦の研究成果も踏まえ、田畑のなかに高まりとして残る「土壇」（建物の基壇）に着目、第二次大極殿及び東区朝堂院と呼んでいる平城宮中樞部の建物配置を復元し、こここそが平城宮跡であることを明らかにして基壇の保存を訴えた。明治三十三年（一九〇〇）元旦に『奈良新聞』一面に大きく掲載された「古の奈良―平城宮大極殿遺址考」である。この新聞記事の影響は大きく、これによって、地元の都跡村の有志たちは平城宮跡の顕彰に立ち上がることになる。

ただ、「顕彰」は「保存」と意味合いが少し違う。明治時代のこの頃は、「文化財」という言葉も概念も確立されておらず、社寺にある宝物を対象にした調査がはじまった時代。考古学という学問も、本格化するのには大正以降であるから、この時期に地下に眠る埋蔵文化財の価値や保存について、目を向ける素地はまだなかったのである。一方で、明治維新を経て、天皇中心の近代国家を目指す世相のなかで、奈良時代の天皇のご在所としての平城宮が広く知られることなく、田畑のなかで荒れ果てたままでもいいのかという、義憤のようなものが背景としてあった。そこに関野の「古の奈良」の発表が作

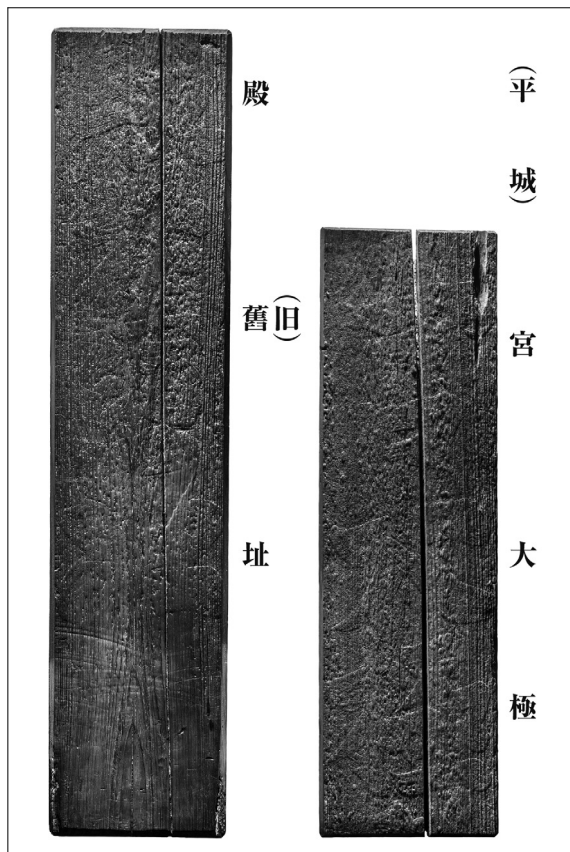


図2 「平城宮大極殿舊址」の標木（明治34年）
写真提供 奈良文化財研究所

用して平城宮の顕彰運動の機運が醸成されたともいえる。この顕彰運動がのちの平城宮跡の保存運動の先鞭となつたことはいままでもない。

そして、この顕彰運動は明治三四年（一九〇一）春、第二次大極殿の基壇上に「平城宮大極殿舊（旧）址」と記された標木の建立という形で結実する。近年、この初期の平城宮跡保存運動の関係資料やその標木（図2）が、地元の旧家でそれぞれ発見され、昨年、奈良文化財研究所（以下、「奈文研」と記す）の展示公開施設である平城宮跡資料館の、春期特別展「未来につながる平城宮跡―保存運動のあけぼの―」において、まとめて公開された。これ以降、標木の建立にかかわった地元の有志に奈良の植木商であった棚田嘉十

郎が加わり、保存会が結成されて、熱心な顕彰運動・保存運動が展開されていく。寄付金による土壇とその周辺地の買い取りや、明治四三年（一九一〇）の「平城奠都千二百年祭」などを経て、大正十一年（一九二二）、史跡名勝天然記念物保存法により「史跡」に指定された。この指定を受けて内務省が建てた石碑とこの指定を機に解散した保存会による石碑は、朱雀門を過ぎて近鉄奈良駅方向に走る電車の左側の車窓から間近にみる事ができる。

なお、この時の史跡の指定範囲は、関野貞が推定した平城宮の範囲であり、現在の平城宮跡の範囲からみると、非常に小さい面積である。大正三年（一九一四）に開業した大阪電気軌道（大軌）の路線（現、近鉄奈良線）は、

史跡指定前でありながらも、遺跡を壊さないようにした配慮があったように、この推定範囲を避けるように大きく南に迂回して線路を敷設している。

戦前には、史跡指定を受けて第二次大極殿院回廊東南隅で行われた大正三年（一九二四）と、偶発的にみつかった石組溝（現在「東大溝」または「SD2700」と呼ばれる）を調査した昭和三年（一九二八）の二度にわたる調査が行われた。特に前者の調査では、平城宮跡の範囲がさらに北側へ拡がっていることが判明し、昭和十一年（一九三六）には史跡の範囲を拡大すべく追加指定が行われた。ここで強調したいのは、当たり前のように私たちが知っている現在の平城宮跡の全貌は、当時はまだ誰も知らないということである。平城宮跡の全体形も四周も特定できておらず、まさに手探りの状況で調査が行われていたのである。

戦後、文化財保護法の制定を受けて、昭和二七年（一九五二）三月、平城宮跡は遺跡のなかでも「国宝」に匹敵する「特別史跡」に指定された。同年四月、奈文研が奈良公園内にある関野貞設計の旧奈良県物産陳列所（現、仏教美術資料研究センター）に設立され、平城宮跡の発掘調査を中心的な立場で進めることとなり、現在の都城発掘調査部のもととなる発掘調査部も置かれた。戦後の奈文研による発掘調査により、平城宮跡の範囲確認、中枢部の解

明が行われ、その調査・研究成果から導かれたのが図1なのである。

しかし、その後の平城宮跡の調査研究と遺跡保護が順風満帆に進められてきたわけではない。高度経済成長期を迎え、全国各地で遺跡の保存と開発がせめぎあう状況が生まれた。平城宮跡では、昭和三六年（一九六一）、平城宮の四周が未確定の段階で、平城宮跡西南部に近鉄の西大寺車庫の移転が計画された。史跡の指定地外であったので計画自体には問題はなかったのだが、発掘調査で平城宮の西南隅が検出され、平城宮跡の一部が破壊されてしまふ恐れが生じた。また、同三九年には、平城宮の東側に沿って国道二四号バイパスの建設が計画された。その事前調査では、平城宮東辺で検出されるはずの門の遺構が全くみつからず、正方形で想定されていた平城宮が東への張り出し部（東院地区）をもつことが新たに判明したのだった。

この二件に関しては新聞報道も多くなされ、全国的な平城宮跡保存運動に発展した。前者の車庫移設にあたっては、当時の文部大臣に提出された「埋蔵文化財保護に関する請願書」、つまり全国で集められた署名一式が奈文研に保管されており、昨年はじめて公開された。それをみると、関西に限らない全国で、様々な年齢の男女が署名していたことがわかる。学校や会社単位での署名もみられた。こうした動きを



図3 復元された大極門（中央）と復元工事中の東楼（右端）
写真提供 奈良文化財研究所

「朱雀門ひろば」にガイドンス施設「平城宮いざない館」をはじめ新しい施設がオープンし、賑わいをみせている。令和四年（二〇二二）には第一次大極殿の正門にあたる大極門の復元工事が完成した。また、その大極門の東側では令和七年（二〇二五）の竣工を目指して東楼の復元工事が進んでいる（図3）。現在までに平城宮の規模や四周は確定されたものの、宮内の発掘調査は面積にしてまだ四割弱しか進んでおらず、今後も発掘調査や研究は続けられる。

「平城宮跡は草原しかなかった」というイメージは「今は昔」。発掘調査後には埋め戻されてしまふ遺跡をわかりやすく一般の方々にみていただくために、整備や復元事業、また平城宮跡を「遺跡博物館」として活用する取り組みも継続されている。そうした取り組みも、発掘調査や分析、研究の蓄積・進展によってブラッシュアップされ、遺跡の復元や活用も徐々に展開されている。遺跡についても単に過去のものとしてみるのではなく、現在までの時の流れと現代とのかかわりのなかで味わうと、今までとは違う景色がみえてくる。日本の礎を築いた奈良時代の都、平城宮跡が現在まで素晴らしい状態で残ってきた奇跡と軌跡に想いを馳せつつ、平城宮跡が進化していく今後に注目していただきたいと願っている。

おわりに

本稿で述べてきたように、平城宮跡はこの一〇〇年の間、激動の歴史を歩んできた。そして、平成三〇年（二〇一八）には国営歴史公園が開園し、

（奈良文化財研究所企画調整部展示企画室長）

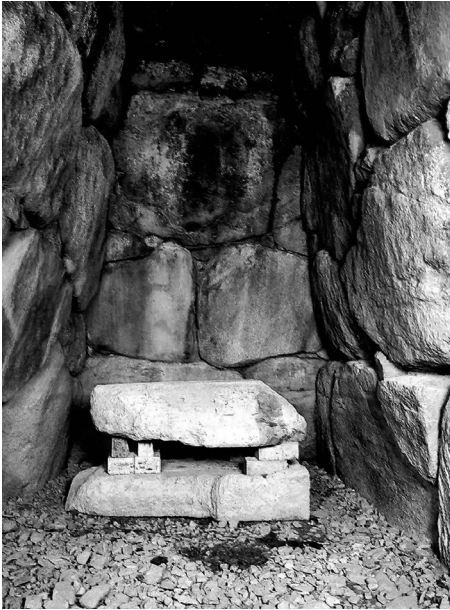
馬見古墳群と牧野古墳

ばくや

関川尚功

はじめに

奈良盆地西部の馬見丘陵に広がる馬見古墳群は、近畿を代表する大型古墳群の一つで、古墳時代前期から後期のはじめまでの大型古墳が築かれている。「馬見丘陵公園の古墳」『近畿文化』八五九号参照)。この馬見丘陵の中央部、前期古墳の佐味田宝塚古墳(北葛城郡河合町佐味田)の近くには、巨大な横穴式石室をもつ直径五〇呎の大型円墳、牧野古墳(北葛城郡広陵町馬見北)があり、馬見丘陵には、ほかにこのような古墳がないので、ひときわ目立つ存在となっている。



写真提供 奈良県立橿原考古学研究所

牧野古墳 玄室
第三〇代敏達天皇の第一皇子である押坂彦人大兄皇子の名が記されている。牧野古墳の築造時期とその規模がこの皇子の墓にふさわしいと最初に唱えたのは網干善教氏(関西大学名誉教授)で、それ以来、この古墳は古墳時代末期から飛鳥時代初期の大型石室墳の基準とされてきた。この牧野古墳の石室に最も似ているのは、第三二代崇峻天皇の真の倉梯岡上陵といわれる赤坂天王山古墳(枚井市倉橋)である。石室の中心部である玄

被葬者が推定できる牧野古墳

飛鳥時代前後の巨石墳の多くは飛鳥とその周辺に集中し、牧野古墳のように大和の西部に所在することはきわめて異例である。なぜこのような大型古墳がここに築かれたのか、その手がかりは牧野古墳の被葬者にある。古代の古墳台帳ともいえる『延喜式』には、「大和国広瀬郡」所在の成相墓被葬者として、第三〇代敏達天皇の第一皇子である押坂彦人大兄皇子の名が記されている。牧野古墳の築造時期とその規模がこの皇子の墓にふさわしいと最初に唱えたのは網干善教氏(関西大学

室の大きさを比べると、共に長さが六・五呎、幅が三・三呎、高さが四呎を超えるなど規模が非常に近い。また、石材の積み方も奥壁は三段である。側壁は牧野古墳が四段、赤坂天王山古墳が三段であり、前者がやや古いといえようが、地域の違いを除けばよく似ていることは確かである。

異なる点は古墳の形である。赤坂天王山古墳は同時期の天皇陵と同じく大型の方形墳であるが、牧野古墳は大型の円墳となり、皇太子クラスの墓として天皇陵との形の違いが理解できる。但し、墳丘の長さと同直径が五〇呎と同規模である。

牧野古墳の存在で重要なことは、その後も敏達天皇系の王族・皇子たちの墳墓がこの地域に所在することを文献から確認できることである。押坂彦人大兄皇子の第一皇子である田村皇子(のちの舒明天皇)の兄弟にあたる茅渟王の墓は、広瀬郡に隣接する葛下郡にある。具体的な古墳は不明であるが、天武天皇の第一皇子で長屋王の父にあたる高市皇子の墓も広瀬郡に所在し、牧野古墳から遠くないところにあったと思われる。そして奈良時代はじめの長屋王邸宅跡からは多くの木簡が出土し、そのなかにこの地域の地名である「片岡」が記されており、長屋王に至るまで代々の第一皇子、いわば皇太子クラスの有力王家が関わる地域であったことが知られる。

有力王家が治めた大和の西部

古代においては天皇や大豪族が目ざされやすい。しかし、天皇を出すような主流といえる有力王家も重要である。皇太子クラスの墓という牧野古墳の性格は、大型古墳は存在すれども天皇陵はみられないという馬見古墳群の性格に通じるのではないかと思われる。牧野古墳の存在は、それ以前から築造がはじまった馬見古墳群の成立以来、有力王家が継続してこの地域を治めていたことを示すものとみられる。

大和西部は西の関門

なぜ、大和西部が馬見古墳群成立以来、重要地域とされてきたのか。それは、この地域が大和の都から大阪の港の地域に至る西の関門にあたるからであろう。飛鳥時代、天武天皇の時代には「大坂関」と「竜田関」が置かれている。前者は地名からみて、今の香芝市関屋のあたりとされる。大和の西の門戸として関所が置かれる大和西部地域の重要性は、古代を通じて全く変わっていないことがわかる。このような重要地域であるからこそ、早くからこの地域の統治と防備のために、豪族ではなく天皇に近い有力王家が直接支配を行ったのであろう。牧野古墳は、古代の大和西部の重要性と、古墳時代からこの地域を治めた有力王家の存在をよく示しているといえるのである。(上牧町教育委員会文化財専門員)

謎多き女帝 皇極(斉明)天皇

梅前佐紀子

『近畿文化』をご購読の皆さま、はじめまして。梅前佐紀子と申します。「飛鳥古代史チャンネル」というユーチューブチャンネルを運営しています。動画を通じて古代史の魅力を多くの人に伝えていこうと、日々奮闘しております。近畿文化会のホームページでも、臨地講座の魅力を身近に感じたいたくべく、「近畿文化会 臨地講座 人気講師と行く飛鳥」というシリーズの動画を公開しています。皆さまぜひご覧ください。

さて、突然ですが、「古代の女帝」といわれて思い浮かべるのは誰でしょうか。 厩戸皇子・蘇我馬子とともに飛鳥時代を切り開いた推古天皇でしょうか。それとも、夫とともに戦乱に打ち勝ち、その偉大な意志を継いで君臨した持統天皇でしょうか。八代六人とされる古代の女帝のなかでも、この二人は小説や漫画などにもたびたび取り上げられ、圧倒的な知名度と人気を誇る、古代女帝の「センター」です。

けれども、私が興味をひかれてやま

ないのは、「皇極(斉明)天皇」です。ご存知のとおり、彼女は舒明天皇の妃で、中大兄皇子(のち的天智天皇)と大海人皇子(のち的天武天皇)の母であり、乙巳の変、百済救援と、わが国が重要な転換点を迎えた時に在位していた天皇でもあります。

ところが、この皇極(斉明)天皇、なぜか影が薄いですね。ドラマや小説などでも、乙巳の変で蘇我入鹿が切りつけられた時、「こ、これは何事じゃ!」とか叫んで奥に引っ込むだけしか出番がない、完全な脇役扱いです。

そんな皇極(斉明)天皇ですが、私は彼女のことを「たぐいまれ」な天皇であると思っています。

まず、史上はじめて讓位した天皇であるということ

です。 『日本書紀』を読むとわかるように、それまでの天皇(大王)は、崩御が退位の条件でした。つまり、一

度即位したら死ぬまで天皇(大王)であることが求められたのです。それが悲劇を招いたことは、推古天皇の例で明らかでしょう。推古天皇は、敏達天皇の妃として、そして欽明天皇の娘として、欽明天皇の「孫世代」に皇位を継承すべく即位した「つなぎ」

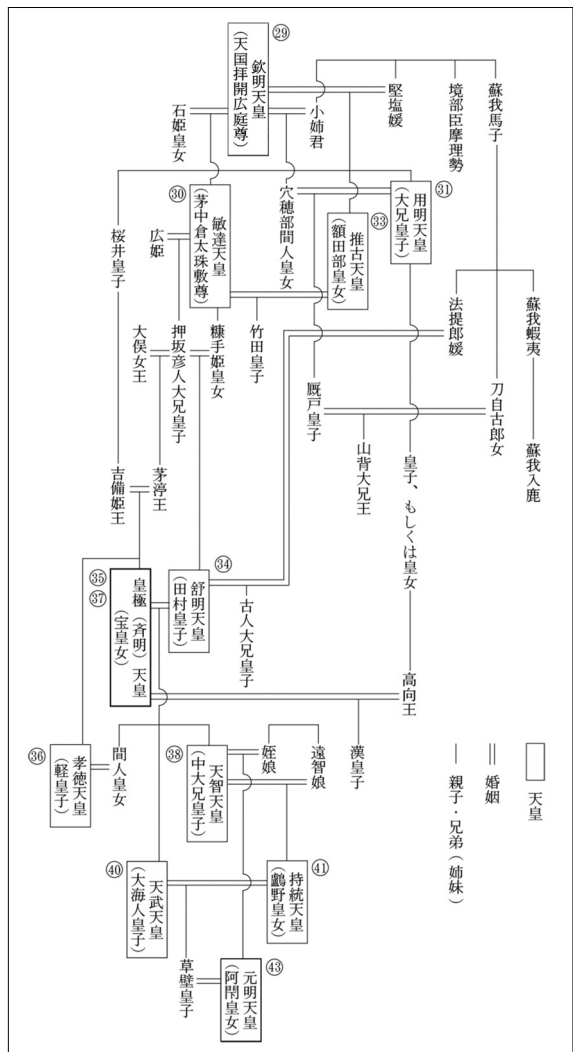
の天皇だったと考えられます。ところが、彼女の在位が長すぎた、つまり長生きしすぎたゆえに、彼女の本来の目的だったと思われる竹田皇子(敏達天皇と推古天皇の間に生まれた子)はおろか、甥である厩戸皇子やその弟までもが没してしまい、皇位を継ぐべき欽明天皇の孫世代は死に絶えてしまったのです。

孫世代に皇位がわたらなかつたことで、その下の世代である「曾孫世代」

への皇位継承は混乱をきわめました。推古天皇の崩御後、押坂彦人大兄皇子の子である田村皇子(のちの舒明天皇)と、厩戸皇子の子である山背大兄王が、朝廷を二分する争いを繰り広げることになったのです。

舒明天皇の没後、その妃であった宝皇女が皇極天皇として即位します。彼女もまた、欽明天皇の曾孫世代に残っている山背大兄王や、自らの弟である軽皇子(のちの孝徳天皇)など、有力な皇子たちの争いを避けるために即位した「中継ぎ」の天皇だったと考えられます。

彼女の在位中に山背大兄王は排除され、代わってその下の世代、欽明天皇の「玄孫世代」が皇位継承者として浮上してくるようになりました。その筆



皇極(斉明)天皇と文中に出てくる人物関係図

頭の古人(ふるひとのおおえ)大兄皇子を推していたのが蘇我本宗家でした。なにしろ古人大兄皇子(おほえみこ)の母は、蘇我蝦夷の妹である法提(ほてい)郎媛(わらわ)だったのですから、それも当然のことです。蘇我入鹿が殺され、蘇我本宗家が滅亡することになった乙巳の変の原因は、そのあたりにあったとする説もあります。

乙巳の変のあと、皇極天皇は弟である軽皇子に位を譲ります。わが国の歴史上、はじめてとされる譲位です。それまで一度も行われたことのない譲位ですが、なぜそれが可能だったのか、そしてどうやって行われたのかについては諸説あります。

まず、推古天皇の在位が長すぎたことを踏まえ、その轍(ついで)を踏むまいとしたとする説。次に、乙巳の変の衝撃が彼女(彼女)を天皇(大王)の座から引きずり下ろしたという説。あるいは、乙巳の変で入鹿とともに殺されるはずだったところを弟である軽皇子の恩情によって赦されたとする説。

などなのですが、個人的には、皇極天皇が、古人大兄皇子の即位を阻止するために、中大兄皇子らが密かに練っていたクーデター計画をみてみぬふりをして、それと引き換えに弟に位を譲ったのではないかと考えています。あるいは、クーデター発案者は皇極天皇本人だったのでないかなどという、極端な考えも頭をよぎります。

いずれにせよ、新しい時代を切り開

くためには、新しい天皇(大王)の力が必要と彼女が判断したのは間違いありません。

§ § §

皇極(斉明)天皇を「たぐいまれ」な天皇であると考え理由のふたつ目は、史上はじめて重祚(ちゆうそん)した天皇であるということ。もちろん、譲位を行ったのが史上はじめてなら、重祚も史上初なのは当然といえは当然なのですが、二回目の即位には、彼女の強い意志が働いているような気がしてならないのです。

乙巳の変後に即位した孝徳天皇は、都を難波に遷し、大化改新と呼ばれることになる政治・行政の大改革を推し進めました。それが行き過ぎたのか、あるいは別の理由があったのか、孝徳天皇の治世がはじまってから八年目の白雉四年(六五三)、中大兄皇子は、皇祖母尊と呼ばれていた皇極天皇、弟である大海人皇子、そして孝徳天皇の妃となっていた妹の間人皇女までもを伴って、飛鳥に戻ってしまいます。

これに関しては諸説ありますが、前天皇である皇極天皇の同意なくして、そのような行動に出られたとは思えません。朝廷に仕える人々がこぞって飛鳥へ向かったというのも、皇祖母尊である皇極天皇の指示があったことではないでしょうか。

なので、その翌年、孝徳天皇が崩御した際、皇極天皇が再び皇位についた

のは、ある意味当然のことのように思えます。『日本書紀』ではその場面を、中大兄皇子の思惑によって母親を再び皇位につけたかのようなニュアンスで描いていますが、それは『日本書紀』編纂時の朝廷において、中大兄皇子の血統が重視されていたことによる忖度(そんたく)だった可能性があります。

§ § §

斉明天皇となつてから、彼女はさらに「たぐいまれ」な行動に出ます。

斉明天皇六年(六六〇)、唐と新羅の連合軍が百済の王都を攻めて泗沘城を陥落させ、倭国と長年の友好関係にあった百済は滅亡します。その報を受けた斉明天皇は、救援軍を率い、自ら船に乗って九州へ向かうのです。

この斉明天皇の出陣以降、天皇という地位にある人が九州の地を踏んだのは、明治五年(一八七二)に行われた明治天皇の九州巡幸までありません。実に一二〇〇年以上の長きにわたって、天皇の位にある人物が九州に足を踏み入れることはなかったのです。

それも斉明天皇が行ったのは、巡幸ではなく「戦い」です。実際に剣を取って戦うわけではないにせよ、名目上は倭国の最高執政者として、戦いの指揮を執るべく九州を目指したのです。

斉明天皇の正確な年齢はわかっていませんが、様々な史料や弟である孝徳天皇の年齢などを勘案すると、彼女はその時六八歳前後だったと考えられま

す。六八歳。現代でしたらその年齢で元氣な女性は大勢いますが、時は古代です。栄養状態や平均寿命を考えれば、現代でいえば八〇、いや九〇越えといってもいいくらいの年齢だったといえるでしょう。

もちろん、この西征は彼女の意志ではなかったという説もあります。なかには、戦いを押し進めたい中大兄皇子らに拉致されたという説まであります。進路上での徴兵をスムーズに行うために、天皇(大王)本人の出陣が何としても必要だったために、老齡の母を船に乗せて出発したという説です。けれども、長年にわたって天皇の地位にあった人物、それも史上初の譲位と重祚を経してきた人間を、無理矢理船に



牽牛子塚古墳 写真提供 明日香村教育委員会

乗せることなどできるでしょうか。個人的には、彼女の意志、それも強い意志によって、西征の船に乗り込んだのではないかと考えています。

斉明天皇が西征の途についたのは、斉明天皇七年（六六一）正月のことでした。その年の七月、彼女は九州の朝倉宮で崩御しています。飛鳥に戻った遺骸は、川原の地で大葬ののち、仮陵を経て、小市岡上陵に葬られました。先年復元工事が完了した牽牛子塚古墳（高市郡明日香村越）は、斉明天皇の真陵の可能性が高いとされています。

§ § §
 以上のように、皇極（斉明）天皇の「たぐいまれ」な点をみてきましたが、実際の彼女はどんな女性だったのでしょうか。ここからは想像の翼を広げ、あれこれ考えてみたいと思います。

皇極（斉明）天皇の前半生は、謎に包まれています。

先にも触れたように、彼女の正確な年齢は『日本書紀』には明記されていません。弟である孝徳天皇の没年齢や、『二代要記』などの史料から考えると、多少のずれはあるかもしれませんが、六八歳前後で没した可能性が高いと思われるます。

六八歳で没したと仮定し、逆算すると、彼女が生まれたのは推古天皇二年（五九四）ということになります。同じように没年齢から逆算すると、第一子である天智天皇を生んだのは推古天

皇三四年（六二六）。皇極（斉明）天皇はその時、数えて三三歳です。今でも三三歳での出産など珍しくも何とありませんが、一〇代も半ばを過ぎれば婚姻関係を結んだとされる古代において、これはかなりの高年齢出産といえるでしょう。

これについては答えがあります。皇極（斉明）天皇は、舒明天皇と結ばれる前、別の男性のもとに嫁いで一子をもうけているのです。

彼の名前は高向王。『日本書紀』には、用明天皇の孫であると記されています。既戸皇子を筆頭に七人いたとされる用明天皇の子どものうち、誰が高向王の父親、あるいは母親なのか、明らかではありません。けれども、用明天皇の孫ということは、それなりの地位と財産を兼ね備えた男性だったことは間違いないでしょう。

一方の皇極（斉明）天皇も、父親は押坂彦人大兄皇子の子・茅渟王で、母親は欽明天皇と蘇我稲目の娘・堅塩媛との間に生まれた桜井皇子を父にもつ吉備姫王です。なので、皇極（斉明）天皇は、幼い頃から経済的にも地位的にも恵まれた環境に育ったと思われるます。高向王とは、どちらも欽明天皇の曾孫同士、釣り合いのとれた縁組だったといえるでしょう。

二人がいつ結ばれたのか、詳しいことはわかりません。二人の間に漢皇子という男子が生まれたという記録が

『日本書紀』に残っていますが、彼がいつ生まれたのか、その後のような人生を歩んだのかについて、知るすべはありません。

そしてそのあと、三三歳で中大兄皇子を生むまでの間に、皇極（斉明）天皇は、高向王と死別したか、あるいは離別し、のちに舒明天皇となる田村皇子の妃となったというわけです。

想像をたくましくして考えると、皇極（斉明）天皇は、用明天皇の血筋である高向王から、自らもその血を引く押坂彦人大兄皇子の子である田村皇子へ「乗り換えた」と考えることもできます。あるいは、用明天皇系の血筋の筆頭には、既戸皇子の子である山背大兄王がいて、高向王では彼を上回ることはできないと見切ったことだったのかもしれない。実際、推古天皇が崩御した際、次の大王の位をめぐる争ったのは、田村皇子と山背大兄王でした。朝廷を二分する論争がわきおこり、蘇我馬子の弟とされる境部臣摩理勢の死という大きな代償を払って、田村皇子が大王の位を手にするようになりました。

結果論にすぎないかもしれませんが、皇極（斉明）天皇は、大王の位につき確率が高いほうの男性を選んだと考えることもできるのです。

ですが、『日本書紀』においては、かなりの過小評価を受けています。それが彼女が古代女帝のセンターを取れない原因でもあるのですが、皇極天皇だった時代には蘇我入鹿の傀儡だったかのように書かれ、斉明天皇として重祚したのは中大兄皇子のいいなりだったかのように書かれています。まるで、彼女の意志などどこにもなかったかのように。

これは、『日本書紀』編纂当時、天智天皇を父にもつ持統天皇や元明天皇が皇位にあったことと無関係ではないでしょう。天智天皇をもち上げようとするほど、蘇我入鹿や皇極天皇、孝徳天皇、そして重祚したのちの斉明天皇を下げざるを得なかったのです。けれども、そうしたフィルターを取り払ってみてみれば、激動の時代を、自らの強い意志と力で乗り切ろうとした、皇極（斉明）天皇の姿がみえてくるような気がします。その姿に私は、限らない魅力を感じてやみません。（飛鳥応援大使）

◆近畿文化会 臨地講座 人気講師と行く飛鳥
 ① <https://youtu.be/1f1JUNYD4Fo>

◆飛鳥古代史チャンネル
 ② <https://youtube.com/@umemaeSakiko>




受付中の臨地講座等のご案内

10月11日(水)から受付を開始する講座

・10月21日(土) 進化する平城宮跡

のこった奇跡とのこした軌跡

「集合 近鉄大和西大寺駅中央改札口 9時
30分/講師 奈良文化財研究所企画調整部
展示企画室長 岩戸晶子/費用 会員二、八
〇〇円 一般三、八〇〇円」は若干名受付中。

・10月28日(土) 馬見丘陵公園の古墳と牧野古墳

「集合 近鉄田原本線箸尾駅改札口 10
時/講師 上牧町教育委員会文化財専
門員 関川尚功/費用 会員三、九〇〇
円 一般四、九〇〇円」は好評受付中。

・11月12日(日) 古代磐余を考ふる(昼食付)

講師 奈良大学准教授 相原 嘉之
集合 近鉄大阪線大福駅改札口 9時50分
行程(徒歩7分)大福駅:百済大宮・大寺
「遠望」以下、桜井市:磐余池推定地
(東池尻・池之内遺跡):稚櫻神社:安倍
寺跡(安倍史跡公園):安倍文殊院「昼食
本堂拜観、文殊院西・東古墳」:上之宮遺
跡:若櫻神社:石寸山口神社:磐余
池推定地(ヤマト)桜井南店:近鉄・J
R桜井駅「15時50分頃解散予定」
好評受付中(事前申込制、前納、荒天中止)
費用 会員六、九〇〇円 一般七、九〇〇円
その他 ①昼食は安倍文殊院客殿で
「知恵弁当」です。②イヤホンガイ
ド使用料(五〇〇円)を含みます。③
11月7日(火)以降の取消は三、九〇
〇円(講座開催費)を負担。

・☆12月9日(土)

書寫山圓教寺の伽藍・建築・仏像をあぐる

講師 京都大学大学院教授 富島 義幸

集合 JR姫路駅中央改札口 10時

行程(一部路線バス・ロープウェイ・マイク
ロバス利用、徒歩2分)JR姫路駅:
「姫路駅(北口)バス停留所」書寫山
ロープウェイ「バス停留所、書寫山
+山上駅」摩尼殿下:圓教寺摩尼殿
(以下、姫路市):十妙院:「昼食」:
本
多家廟所:三つの堂「大講堂・食堂常
行堂を特別拜観」:奥の院「開山堂・護法
堂拜殿を特別拜観」:鐘楼:摩尼殿下
+山上駅+書寫山「書寫山ロープ
ウェイ」バス停留所+「姫路駅(北口)」
バス停留所「17時10分頃解散予定」
定員 40名(事前申込制、前納、荒天中止)
代金 会員七、七〇〇円 一般八、七〇〇円
その他 ①弁当持参(圓教寺会館)、または
境内のはづき茶屋で各自自由昼食です。
②山上駅+摩尼殿下間は境内運行のマイ
クロバスに往復乗車します。③イヤホン
ガイド使用料(五〇〇円)を含みます。

・☆12月16日(土)

百済王氏の足跡を訪ねて、難波から交野へ

講師 近畿大学教授 網 伸也

集合 JR環状線桃谷駅南改札口 9時20分

行程(一部近鉄バス(株)の貸切大型観光バス利
用、徒歩2分)JR桃谷駅:豊川稲荷大
阪別院観音寺(堂ヶ芝庵寺)(以下、大阪

市):四天王寺「講師講演、境内拜観」
部)、中心伽藍は各自拜観」:「昼食」+空
見の丘公園(枚方市)「交野市立歴史民
俗資料展示室(交野市)」「河内百済寺跡
(以下、枚方市)」「交野天神社」「京阪本
線樟葉駅「16時50分頃解散予定」
定員 40名(事前申込制、前納、荒天中止)
代金 会員七、三〇〇円 一般八、三〇〇円
その他 ①四天王寺周辺で各自自由昼
食です。②イヤホンガイド使用料
(五〇〇円)を含みます。

近鉄文化サロン阿倍野共催講座

※近畿文化会では、受付をしております。
■連続講座 ユリイカ
考古学からみた古墳時代の争乱
第1回 11月4日(土) 磐井の乱とヤマト王権
第2回 12月2日(土) 武蔵国造の乱とヤマト王権
第3回 1月6日(土) 吉備の反乱と葛城氏の盛衰
第4回 2月3日(土) 丁未の倭・蘇我物部戦争の実像
講師 大阪府文化財センター 森本 徹
時間 10時30分~12時(10時受付開始)
会場 近鉄文化サロン阿倍野
受講料 各回とも会員二、二〇〇円
(会員証提示が必要、Web入金割引有)
※詳細は同封のチラシを、ご参照ください。
【お申込】入金 近鉄文化サロン阿倍野
電話 〇六一六六二五一一七七

◆講座のお申込および受付後のお取消

電話 〇六一六七五―三六八六

時間 9時10分~18時(土・日・祝日は休み)

FAX 〇六一六七五―三六六九

Eメール kindun@w.kinetsu.co.jp

FAX、Eメールは受付開始日の9時10分以降24時

間受付可能です。(4営業日前以降は電話のみ受付)

◆講座の参加費用・代金は、受付完了

後から講座開催日の1週間前までに、

講座日・講座名・会員番号・住所・氏名

(ふりがな)・電話番号を明記の上、郵

便局備付の払込取扱票を使用して、郵

便振替口座「〇〇九六〇―二一三〇四一

四三」近畿文化会へお振込みください。

※正式加入者名は「近鉄グループホールディングス

株式会社 近畿文化会」です。

◆「☆印」は旅行業務扱いのため、旅

行業約款を適用し、お取消(キャンセル)

の取扱いは旅行条件書によります。

大阪府知事登録旅行業第2-139号(二社)全国旅行業協会正会員

近鉄グループホールディングス株式会社(大阪東区上本町1-1-55)

※詳細は同封のチラシを、ご参照ください。

【お申込】入金 近鉄文化サロン阿倍野

電話 〇六一六六二五一一七七

※掲載内容は9月22日(金)時点のものです。

近鉄グループホールディングス(株) 近畿文化会(年会費三、〇〇〇円(家族会員一、五〇〇円)郵便振替口座〇〇九六〇―二一三〇四一四三 近畿文化会【会員特典】毎月「近畿文化」郵送(本会員のみのみ)。

臨地講座(費用代金別送)に会員価格で参加可能。【お問合せ】〇六一六七五―三六八六

